

観自在

弘長寺寺報
第十九号
平成二十一年八月

弘長禅寺第三墓地

新規造成完了

弘長寺住職 森田裕光

お知らせしておりましたように、阿弥陀堂横の駐車場を墓地に造成いたしました。

造成工事は、お檀家様の「飯塚組」にお願いいたしました。非常に良心的で丁寧な工事をしていただき、立派な墓苑となりました。

大小二種類の区画、六十八区画を用意しました。

大 3m×2.5m (7.5㎡) 四十七区画
小 2.7m×2.3 (6.2㎡) 二十一区画

大：四十万円 小：三十五万円

墓地の環境は最高です。

境内地の中にあり、隣接する本堂や阿弥陀堂にもそのままお詣りでき、大梵鐘の音・本堂からの読経の音が聞こえます。宍道湖や国道にも近い、車から降りて、すぐ目の前がフラットな墓地ですので、車イスでも楽にお参り出来ます。

墓地の前には十分な駐車スペースがあります。
(墓地にした大駐車場の代替駐車場を、今冬お寺の北側に造成予定です。)

お檀家様か、檀家にお入りいただく方のみを対象としています。既に数件の予約申し込みがあり、将来入檀を予定される方もお一人ございます。

他宗派や他宗教の方の問い合わせも既にございましたが、お断りしております。

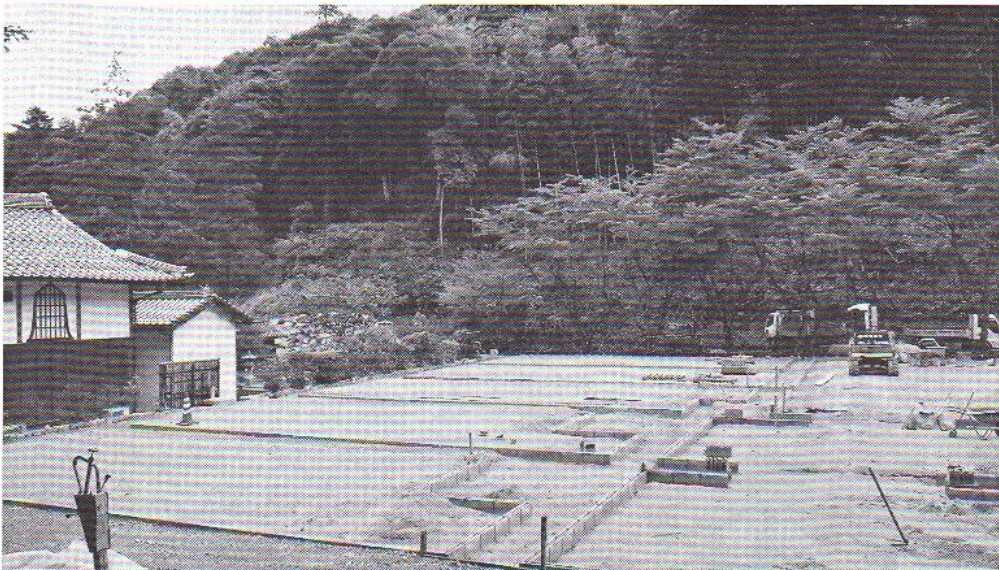
お墓を多く売ることよりも、檀家数が増えることに重きを置きたいと思っております。

新聞チラシを作成して、近隣でお檀家様の多数おられる来待・宍道・玉湯に配らせていただきました。

お墓をお探しの方には是非お勧め下さい。

昔は高い場所、山の奥深い寂しいところがお墓の立地条件として最適と思われるていたようですが、現代では全く不都合であると言わざるを得ません。
(お年を召されればなおさらです)

現在お墓が山の奥や、急な坂上にあつて、墓掃除や墓参に苦労されている方もどうぞご一考下さいませ。



七月末日完成予定 写真は七月二十日撮影

住職は考える

宗派とは何か？②

く敢えて 仏教のタブーに挑む

(住職の独り言)

道元禅師様は、曹洞宗はお釈迦様から正しく伝えられた仏法だから正法であるとお示しであります。

お釈迦様がお悟りを開かれた坐禅は最上唯一の修行法であり、坐禅によって日常のあらゆる行動や思索が整えられると説かれます。

開祖でありますからそうお説きになるのは当然です。

もし別の問い方が許されるとしたならば、では逆に他の宗派は正法ではないのでしょうか。そして正法でなければ仏法ではないのでしょうか。

仏道への信仰形態は多種多様であつて良いと思います。だつて八万四千の法門がひらかれている、とお釈迦様がお経の中でおっしゃっているのですから。

いくら正しい法であつても現代の時代性や個々の機根に応じて説かれなければ、受けとめる側に正法(最適の法)として伝わらないはずで、坐禅でなく、念仏や唱題行で

あつても、仏様を信じていることができ、安心を得ることができれば、それも立派な正法だと思います。

人それぞれ能力が違い機根が違うのですから、誰もが必ず最高の境地に至らなくてはならないということではありませんし、強制など無理できません。

お檀家様にとつて不幸なことは、自分にピッタリ合った、自分に好みの修行法や仏様を抱える宗派を、最初から選ぶことができないことではないかと思ひます。

江戸時代から幕府の政策によつて、我が家の宗派を既に勝手に決められていた。それはよく言えば「ご縁」と呼べるのかもしれないが、信仰の自由から照らせば、物心がついて気づいた時には既に「特定の宗派の菩提寺の檀家」という足枷がついているということ



江戸時代から何代も我が家に伝えられてきたしがらみによつ

て寺檀という関係が成り立っています。菩提寺と檀家という関係を崩すということは、保守・伝統を重んじる地方の方にとってはおそらく相当の勇気があることでしょう。

私が言いたいのは、寺院住職はそのしがらみに対し、もつと謙虚になるべきであり、数ある宗派(仏教は十三宗もある)の中の一宗派に過ぎないという気配りがもつと必要ではないかと思ふのです。

仏教とは、お釈迦様以来、差別と人権に対する闘いの歴史であるともいえます。人権を最重要課題とすべき僧侶は、徹底的に相手(お檀家)の気持ちを考えてあげようと思ひます。

松江在住のある方が、「親戚の法事に行ったら、その住職が、『我が宗派が仏教宗派の中では一番です』とお説教をした。『そりやおかしいだろう』と思わず声を上げそうになつた。』とおっしゃつてました。

往々にして昔からの檀家であるというしがらみを人質?として高圧的な態度でお檀家様に臨まれる宗侶を時々見かけて考えさせられます。

そりや、お釈迦様も素晴らし

いかもしれないけど、嫁に来る前の実家はナンマンダブで、同じように素晴らしいと思つていの方がおられるなどということに思ひがいたらず、「ウチは曹洞宗だからお釈迦さまだよ、この大日さんの掛け軸は外してよ」だとか、「おぼあちゃん、ナンマンダブではなくてウチは南無釈迦牟尼仏」。

ご本人は宗祖の教えに忠実であり、絶対間違つていないと思つているのだから始末におえません。「他宗侶のふり見て我がふり直せ」の想いになります。

私は曹洞宗の宗侶でありますから、当然仏道修行の最高の行は確かに「坐禅」だと思つています。



しかし、曹洞宗の坐禅は一見解りやすそうですが(仏の真似をすれば仏)、実際に正しく行じようとすればとてつもなく難解で奥が深く、難行です。

(目的を持つてはいけない、悟ろうと思つてもいけない、思考を停止して、考えないところを考えよとのお言葉は、正に禅問答ですよね。)

次号につづく

カナメ
本堂調査報告1

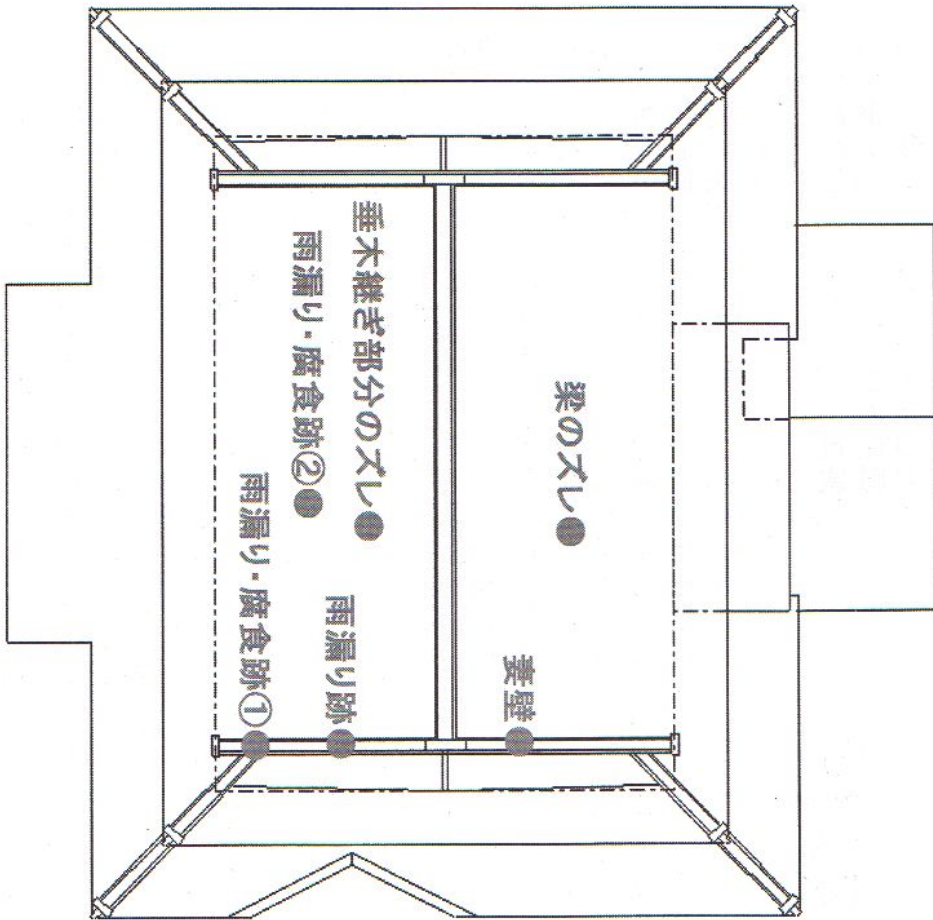
◎普段住職でも入ったことのない場所を撮影調査していただきました。
・最初の調査は視認調査でしたが、今回は機械を導入しての調査となりました。
・屋根の下、小屋裏が意外とお粗末なので驚きました。
・わら葺き屋根から瓦に替えた時に、重量対策が取られていなかったということ。

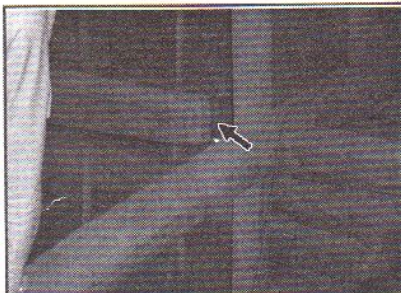
『小屋裏の状態』

再度目視調査を行い、雨漏り・腐食がある箇所、屋根下地材の大きさ・位置等の再確認をおこないました。

昭和の改修事業の際には瓦のみ葺き替えられたとお聞きしておりますので、現状の小屋裏は大正の改修事業の際に組まれたものかと思われます。

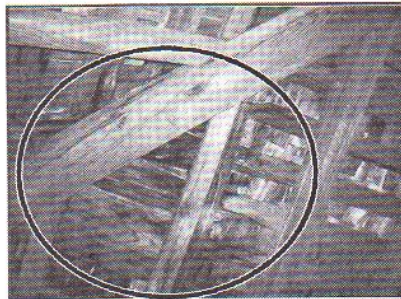
※次ページのそれぞれの写真は右図に記された赤文字の箇所の説明となります。





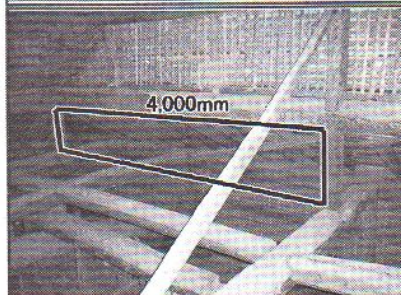
●梁のズレ

一部の梁に、継ぎ部分が外れている箇所がありました。何らかの原因で本堂全体が動いた際に外れたと考えられます。



●雨漏り・腐食跡①

降り棟と隅棟との接合部分の位置に雨漏り跡がみられ、木部は腐食しています。



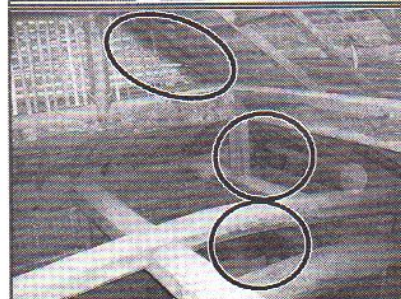
●妻壁

妻壁の梁に対する束の間隔は4mもあり、非常に広く感じられます。土葺の瓦・土壁の荷重を支えていることを考えると、束に相当の負担がかかっていると思われる。



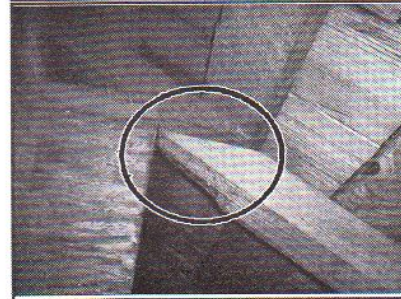
●雨漏り・腐食跡②

本堂正面側の屋根の中間あたりに雨漏り跡がみられ、一部の木部が腐食して折れています。



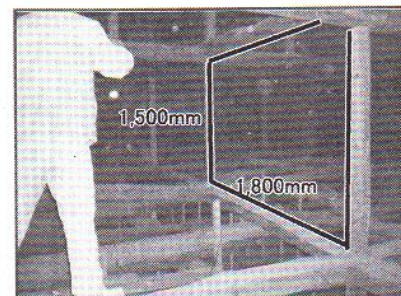
●雨漏り跡

降り棟の位置に雨漏りの跡がみられます。侵入した雨水は桁にまでつたっています。



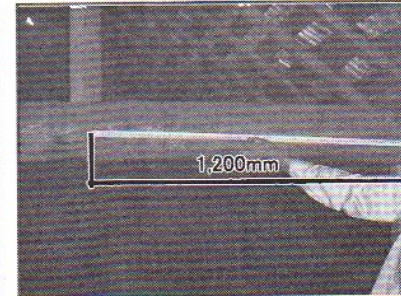
●垂木継ぎのズレ

屋根瓦を支える野垂木の継ぎ部分がズれているのがみられます。継ぎ部分の位置が原因と思われる。



●小屋裏

小屋裏の梁を支える束の間隔は1,800mmあり、土葺きの瓦屋根を支える小屋組としては広く感じられます。また、束の高さは1,500mmあり、高いように感じられます。



●母屋の位置

母屋の間隔は1,200mmあり、土葺きの瓦屋根を支える母屋の間隔としては広く感じられます。

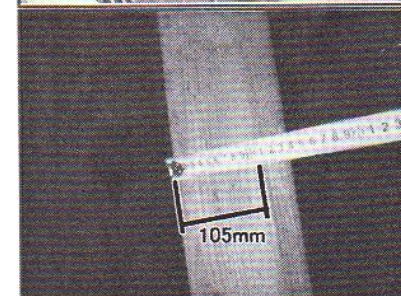


●小屋裏



●野垂木の間隔

野垂木の間隔は500mmあり、土葺きの瓦屋根を支える垂木の間隔としては広く感じられます。



●束の巾

束の巾は105mmで、束の間隔、高さを含めて考えると細い木材を使用しています。



●隅木の跡

桁に化粧隅木の跡がみられます。大正の改修以前の本堂の化粧隅木は現在の2重層の屋根とは異なる形状であったことがわかります。

カナメ本堂調査報告3

葬儀の達人になりましょうはお休みいたします

『耐震補強結果～銅板と乾式瓦の屋根の比較』

【工事内容の比較】

下記に弘長寺様の本堂に耐震補強を行った場合の、銅板屋根と乾式瓦屋根の屋根重量・必要な仕ロダンパーの数量を記載します。

—基準—

震度6強～7程度の地震が発生した場合での、倒壊を免れる程度の耐震補強内容を基準とします。(簡易耐震診断参照)

—補強内容の比較表—

	銅板屋根 (カナメルーフ0.4mm)	乾式瓦屋根 (石州産釉薬和型瓦)
屋根重量 (屋根面積:390㎡)	5,226kg (既存屋根の約1/11)	25,467kg (既存屋根の約1/2)
仕ロダンパー(北⇄南の揺れに対して)	8箇所	52箇所
仕ロダンパー(東⇄西の揺れに対して)	0箇所	36箇所

※既存屋根の重量は56,472kg(弊社カタログ『社寺地震対策』参照)

※仕ロダンパーは高さ30cmの既製品となります。



弘長寺様 本堂(石州産釉薬和型瓦)



永平寺様 聖賢閣(銅板カナメルーフ)

調査結果はほんの一部です。

詳しくお知りになりたい方は、各地区代表の検討委員さんにおたずね下さい。